

四月は出会いの月でもあります。入学や、就職、引っ越しなどで親しんできた環境を離れ、新しい環境に身を置く方も多いことでしょう。人間関係を上手く作れるだろうかという不安や心配もある一方、新しい未来や可能性に胸を躍らせることもあります。

道元禪師は、一二二四年に真の仏法を求めて宋の国、現在の中国に渡りました。当時は書物や、交易に携わる人々を介して先進国である宋の国の情報が入ってきましたが、極めて限られたものでしかありませんでした。そこで道元禪師は直接、自らの肌で本物の仏法を学ぼうとされたのです。そして、本物の仏法を伝え体現してきている師匠を探し出す旅に出ます。

宋の南東部の禅院五山をはじめ、訪れた先々で得た情報を元に、漸く師匠となる天童山の如浄禪師と決定的出会いを果たすのです。

この時の出会いについて師匠の如浄禪師が、「歴代の仏祖たちが『面授』という形で伝えて来た出会いが今ここに実現した。」と、語り掛けてくれたことを道元禪師は感動をもって書き残しています。

「面授」とは、目の当たりに対面したことを意味する「面」と、直々に仏法が伝授されたことを意味する「授」を合わせた言葉です。如浄禪師と道元禪師の「面授」とは、インドの霊鷲山でお釈迦様から摩訶迦葉尊者へ優曇華の華を通じて伝えられたもの、中国の嵩山で達磨大師から慧可禪師に礼拝を通じて伝えられたもの、黄山で五祖弘忍禪師から六祖慧能禪師にお袈裟を通じて伝えられたものと同様のものであったと、『正法眼蔵』、面授の巻に記されています。

仏法そのものは形ある物で伝えられることはありません。仮に伝えられた物があるとしても、それはあくまで媒体、象徴でしかありません。師匠と弟子という人と人との出会いを通じて初めて真の仏法は伝えられていくのです。

更にもう一つ忘れてはならないのは、この師匠と弟子との出会いとは単に人と人が対面しただけのものではないという事です。それを通じて伝えられる仏法にはお釈迦様以来脈々と受け継がれてきた歴代の仏様やお祖師様方の血肉が流れているという事です。

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

さて私たちの周囲を見渡してみると、そこにある様々な物事は、様々な人々が関わって、歴史を積み重ねてきたものばかりです。

この時期は環境の変化に伴い、多くの出会いがなされることでしょう。相手との間に結ばれた不思議なご縁を「面授<sup>めんじゅ</sup>」として捉え直すと、それらとの出会いを通じて生み出される様々な出来事も更に大きな広がり<sup>と</sup>厚みを持って私たちに語り掛けてくるはず<sup>です</sup>。

そこには、もしかしたら今までとは少し違った展開が待ち受けているかもしれません。

— 終 —